

史遊会通信

No.247号
平成27年
11月10日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

九月「天智玉の謎について」の講演要旨

天智天皇の実像

——日本初代の天皇は誰か？——

森下 征二

私は既に二度にわたり、この「史遊会通信」

紙上で、天智天皇の称号に注目し、彼こそが
日本国の初代の天皇であると主張してきた。

天命開別天皇と言う和風諡号が、「天命を受け
て、国を開辦する(「事」を始める・開業する)」

意味を持つだけでなく、漢風諡号の「天智」
の「智」は「知」に通じることから、天

智は「天命を受けて天下を知ろしめす(治め
る)」ことを示すからだ。

それでは何故、第三十八代の天皇とされる
天智が、日本国初代の天皇となり得るのか？
結論を先に言えば、彼こそが将に、倭国を日

本国に改組し、倭王の称号を捨てて、初めて
天皇を名乗ったからである。

根拠は先ず、以下に示す「新唐書」の記載
にある。

咸亨元年、遣使賀平高麗。後稍習夏音、悪
倭名、更号日本。使者自言、国近日所出、以
為名。

(咸亨元年(西暦六七〇年)、使いを遣わし
て、高麗を平するを賀す。稍、夏音(中国語)
を習いし後、倭名を悪(にく)み、更めて日本
と号す。使者、自ら言う、国、日出ずる所に
近し。以て、名と為すと)。

例会のお知らせ

◎ 十一月例会

日時 十一月二十八日(土)

午後四時三十分～六時三十分

九月号の行事計画表では十一月二十一日(土)

となっておりますが、月日・時間共に変更にな

りましたので、注意下さい。

会場 銀座ルノアール貸会議室

テーマ 地政学・ポーランドと韓国

講演(新井宏氏) 討論司会(隆恵氏)

十二月号自由執筆 「今年感動した本」

全員(友の会も含む)

字数 20字75行目安 締切十一月末

この「新唐書」の行を素直に読めば、咸亨
元年(天智天皇九年)に、倭国(当時、既に
日本国と改号していた)が、唐が高句麗を平
定したことを祝賀する使節を送り、その時の
使者が改号の理由を、自ら、日が出ずる所に

近いので日本と名乗ったと、誇らしげに述べたことがわかる。

ところが、古代史学の通説では、「後稍習夏音：」を、私のように「稍、夏音を習った後：」とは読まず、「後に、稍夏音を習い：」と読み、高句麗祝賀の使節を送った後、稍夏音を習って倭名をにくみ、日本と改号したと読んでいる。即ち、国号改称は、平高麗の祝賀遣使とは別の人物によって伝えられたというのである。彼らは「後」を、咸亨元年「後」だ：と勝手に解釈したのである。

勿論、「後に」と読んでも一向に構わないが、この「後」は決して「咸亨元年以後」を意味しない。仮に「後に」と読むとしても、それは当然、「倭国が中国と国交を重ねた後に」と読み取るべきではないか？ さもなければ、倭国の指導者層は、咸亨元年以後になって初めて、夏音（中国語）を少し習ったことになろう。そんなことがあり得ないことは、有名な倭の武王の上奏文や、小野妹子の堂々たる国書を見ても明らかである。六世紀前後（或いはもっと前から）、彼らは既に中国語に習熟していた。倭の持つ意味も十分に承知していたのである。

ところで、咸亨元年の平高麗祝賀使節は誰か？ 「日本書紀」によれば、河内鯨（かわち

のくじら）とされている。この河内鯨でなければ、通説は果たして誰を、日本国号改称の使節だとするのだろうか？ 日本側の資料には、七〇三年の粟田真人まで、遣唐使が派遣された記録はない。

だからだろうか？ 通説は「続日本紀」の以下の記載を根拠に、日本国号を初めて中国に伝えたのは粟田真人だとする。

粟田朝臣真人、唐国より至る。初めて唐に至る時、ある人、来たり問いて曰く、「何れの処の使人か」と。答えて曰く、「日本国の使になり」と。我が使、反つて問いて曰く、「此は是れ、何れの州界か」と。答えて曰く、「是れ大周楚州塩城県の界なり」と。更に問う。「先には是れ大唐、今大周と号す。国号、何に縁りて改称するか」と。答えて曰く、「永淳二年（六八三）、天皇大帝（高宗）崩ず。皇太后登位し、聖神皇帝と称号し、国は大周と号す」と。問答ほぼ了り、唐人、我が使に謂いて曰く、「聞く、海東に大倭国あり、之を君子国と謂う。：」と。語りおわりて去る。

なるほど、粟田真人は日本国の使だと明確に名乗っている。しかし、唐人がこの時初めて日本国名を知ったにしては、余り驚いた様

子がないのは不審である。粟田真人の方は、則天武後の「周」の改称の理由を、根掘り葉掘り糺しているのに：である。それだけではない。唐人は日本国が旧の大倭国であったことを知りながら、釈明も受けず、何故そんなり引き下がったのだろうか？ 朝貢国の分際では、勝手に国号を変えれば厳しく詰問されるはずだが、「続日本紀」が沈黙を守っているのは何故だろうか？

察するに、唐ではその時既に、倭国が日本国に改称していたことは知っていたのではなにか。そうだとすれば、日本の国号が大宝律令（七〇一年）で制定され、粟田真人によって、初めて中国に伝えられたと言う通説は成り立たない。

最近、それを示すかもしれない考古学資料が見つかった。六七八年に亡くなった旧百済の將軍、祢軍（でいぐん）の墓誌が西安で発見され、それに記載された「日本」という二字が話題になっているようだ。もしも、これが日本国を指すとすれば、六七〇年代の中国でも、日本と言う名称が一般化されていたことになる。河内鯨が既に、日本国改称を伝えていたからである。

当時も勿論、朝貢国が勝手に名称を変えることは論外だった。旧唐書が「日本伝」とは

別に『倭国伝』を作ったのは、彼らが倭と日本を、歴史的に連続する同一主体と、看做さなかつた証左だろう。

おそらく河内鯨も、改称の説明にてこずつたのではないか？ だから、彼の言うことは悉く疑われ、その態度は倨傲とされ、新・旧唐書とも、倭の日本改称について、異説を併記する始末になった。

何れにせよ、「新唐書」の記載を素直に読む限り、咸亨元年（六七〇）の平高麗祝賀使節の河内鯨が、六六八年の日本国建国と、天智の天皇即位を唐に正式に伝えたのだ。日本国を建国し、初めて天皇に即位したのは、天智天皇だったのである。

ここで、念のために補足する。いわゆる天智「称制」は、天皇即位以前の、即ち倭王天智の政治体制を指す。河内春人氏が明確に主張されたように、天智は六六一年に倭国王として即位し、六六八年に日本国天皇に即位した。即ち、彼は君主として、二度即位したことになる。

ところが、神武以来一貫して天皇が存在したとする「日本書紀」は、天智が天皇に即位するまで、皇太子のまま政治を執った（称制した）と主張する。しかし、天智は既に倭王として即位していたから、百済に出兵するこ

とができたし、余豊璋を百済王に冊立することができたのだ。残念ながら、日本書紀の主張は受け入れられない。

それでは何故、天智は倭国を改組し、日本国を建国して、天皇に即位しなければならなかつたか？ それは、当時の緊迫した極東情勢の影響である。

白村江の敗戦は、倭国を滅亡の危機に追い込んだ。しかもさらに、国家体制の革命的な変革を迫つたのだ。幸か不幸か、敗戦が倭国の豪族が所有する兵力を壊滅させ、結果的にその力を弱体化させ、王権専制の官僚国家を建設する絶好の機会をもたらした。

英主天智がこれを逃すはずがない。彼は大量の亡命帰化人を官僚として再編し、朝鮮式山城を各地に築いて防備を整え、戸籍（庚午年籍）を編成し、近江令を制定して、君主専制の律令国家を確立すべく、着々と手を打つて行つたのである。時、恰も高句麗滅亡の前夜である。我が国としても国体を変え、新しく生まれ変わらなければ、生き延びることは出来なかつたのだ。

六六七年、近江京に遷都して、一応の体制を整えた彼は、翌六六八年正月、日本国の建国と天皇即位を宣言した。滅亡の危機という国難を契機に、国体を一新した日本は、幸い

にもその時、混乱する極東におけるキャスティングボードを握っていた。その年の九月以降、高句麗の滅亡により、それまで同盟していた唐と新羅が、一転して敵対するようになったからである。

勿論、原因は両国の利害の不一致だ。百済と高句麗を滅ぼした唐は、今度は新たに新羅の属国化を図り、朝鮮半島全域を直接に支配しようとした。これを察知した新羅は、各地の高句麗遺民を扇動して反乱を起こさせ、唐に対し真つ向から敵対した。新羅が唐を追い出し、朝鮮半島を統一するためには、日本国を敵に回す訳には行かない。新羅は天智の日本国に急接近し、敢えて朝貢の礼を取ることにも厭わなかつた。

他方、唐にしても、新羅を征服するには、新たな敵を増やす訳には行かない。日本国に頻りに使いを派遣し、協力を要請して来たのは周知の通りである。

これに対し天智は、高句麗滅亡直前から、唐の下心を見破っていた。唐は高句麗の次には新羅を狙い、新羅が滅亡すれば、今度は日本を滅ぼそうとするだろう。日本が生き残るためには新羅と手を結び、朝鮮半島から唐を追い出さなければならぬ。

しかもそれは、我が国の朝鮮における権益（宗主国の地位）を守りながら…、換言すれば、極東における小帝国を建設しながら実施する必要がある。幸いにも、百済王豊璋の弟・善光を難波に安置していた。高句麗王族の若光も日本に居住しているのだ（彼らは後に、「百済王」、及び「高麗王」と言う姓を与えられた）。新羅が我が国に負い目を持つ時こそ、中国によって名づけられた倭国と言う名を捨て、小帝国にふさわしい「日本」国号に改称し、「王」から一段進んだ「天皇」を名乗る必要があったのである。

そもそも、国号は極めて外交的なものである。白村江敗戦後の国際的な動乱が、日本国と天皇を生んだのだ。それは唐との国交を閉ざし、国内整備に注力した天武天皇には作れない。白村江で敗戦し、倭国を滅亡の危機に陥れた、天智天皇だったからこそ作ることができたのである。天智は将に、天命に基づき日本国を開別（開辦）した、初代の天皇であったと言えよう。

ところで、天智と言う諡号は、神武・崇神・応神・仁徳・天武等々、主要な天皇諡号と同様に、「日本書紀」を編纂した藤原不平等のグループによって選定されたのではないか？

（「甘露寺親長卿記」参照）。正史を書いて初

めて、支配者の簡略な称号の必要性がわかるからである。

そしてそれが、桓武天皇即位の直後、淡海三船（「釈日本紀」所引の私記参照）によって歴代天皇の漢風諡号が選定された時、神武・天智・天武。文武等の、主要な天皇については、従来の呼び名が尊重され、そのまま採用された可能性が強い。何故なら、諡号は極めて政治的なもので、三船のような一人が決定できるものではないからだ。天皇個人、もしくは藤原不平等のような権力者でなければ、決められないのではないか。淡海三船の最終的な選定時も、正式に許可したのは、桓武の外にはないだろう。

「天武」の諡号については、おそらく「天智」と「神武」を意識して付けられた。天武は天智の「天」と、神武の「武」を組み合わせることにより、新しい皇統の創始者でありながら、しかも、天智の後継者であることを明確に示した。壬申の乱に勝利し、弘文天皇を倒した天武の役割は、第二代の日本国天皇として天智の遺志を継ぐこと、即ち、律令制度を整え、国体を整備し、日本国を更に発展させることであった。中国流に廟号を付けるとすれば、天智が太祖であり、天武は太宗だったのである。

それを示す事実がある。それが「不改の常典」なのだ。天武王朝にあっても、皇位継承は、この天智天皇の定めた法によって、実施されなければならなかった。天武系天皇も、天武ではなく、天智の名において即位したのが事実である。

天武の死後、文武・聖武と続いた天武系の「武」の皇統も、聖武の娘の死によって断絶し、天智系の光仁天皇の手に移る。そして、その天智の皇統を確立したのが、光仁の息子の桓武であった。そこで、桓武天皇の諡号にも注目したい。

諸橋轍次氏の「大漢和辞典」によれば、「桓」という字は、「大きい」とか「厳めしい」の外に、「二つ並び立つ」という意味を持つと言う。おそらく彼は、天智系と天武系の矛盾を文字通り止揚し、永遠に自分の皇統が続くことを願って、「桓武」という諡号を付けるよう遺言していたのではないか？ 桓武以後、「武」の字が付く天皇の尊称がないのは、全く意味がない訳でもなからう。

自由原稿

朝鮮半島の南北統一の提言

隆 恵

今月の討論会のテーマは「韓国とのバランス外交」なので、この稿を借りて韓国に大変痛烈な提言を試みたい。この提言は、先日の新井さんのお話からヒントを頂いたので、最初にお断りしておきたい。

先ずホンネの話をします。

韓国も経済的に日本から独り立ちできたからか、ここ十年間は反日の言動が多く、朴大統領になってからはエスカレートするばかりである。病的なまでの反日キャンペーンの羅列と、子供じみた告げ口外交をやり、温厚な日本人でも怒り心頭に来ていると言うのが現状であろう。

韓国は、朝鮮戦争以来資本主義と民主主義の共通点もあり、価値観を共有できる仲間の国と思って来た。しかし、毎日のように土足で我が家に入り暴れまわるような事が続くと、もはや志を同じくする同士ではない。北朝鮮

ほど暴力的ではないが、ネチネチとした陰湿な言動にはうんざりした。

そこで、次にタテマエの話をします。

日米韓の三か国は、朝鮮戦争後約六十年間の長きに亘って、中国や北朝鮮と対峙してきた訳だが、この対立の構図のままでは東アジアの平和と朝鮮の統一は永遠に訪れない。

この対立の構図を抜本的に解きほぐすには、奇想天外とも言える外交の一大転換が必要である。幸いなことに、今回の提言をするタイミングも、共産党政権の中国も名実共の超大国となり、国際社会の一員としてのマナーが身に付きつつあるので、時機到来と思う。

さて、その提言とは次の通りである。

「北朝鮮と韓国の対等での統一の時が来た。半世紀以上に亘る東アジアの対立を解消するために、これまでの日米韓三か国の軍事共同作戦は解消し、今後は正に日米二か国の軍事同盟とする。この統一朝鮮国は、隣国の中国同様の社会主義国になるかもしれない。しかしこれも中国と朝鮮半島の長い歴史と地政学上からも、望むところではないが致し方ない。

従って今後は、東アジアの資本主義と民主主義を共有する親密国は、日米プラス台湾の三か国で構成する。即ち、日米プラス台湾の三か国対中国プラス親中国の統一朝鮮国の二か国が平和的に対峙する事となる。」

この提言の劇薬の効果として、朝鮮半島に親中国の社会主義国ができる事となるが、過去二千年の歴史を俯瞰してみれば、朝鮮半島の大半は中国を宗主国とし、自らはその属国に甘んじて、海を隔てた我が国と敵対してきた訳であり、格別目新しい構図ではない。

その例外は、日韓併合の五十年と戦後の韓国時代の僅か百年間の出来事である。

要するにこの劇薬の狙いは、「日本を敵に回すな」との警告である。日本はいざとなれば韓国を切り捨てても、何の痛痒も感じないという事を知らしめることが目的である。

韓国の強気の源泉は、日本が韓国を中国との緩衝地帯として絶対に必要と決めつけて、日本叩きにしても日本が韓国を見捨てることではないと高をくくっているのである。

同じ発想で、米国が中国大陸の橋頭保である韓国を見捨てないと過信して、日本に対するほど悪態はつかぬが、米国を甘く見ている。外交も恋の駆け引きと似たところがあり、恋人を追いかけてばかりいると、相手に軽く見られてしまう。日本の外交はこの失敗をしてきたと思う。

近年の韓国は、対外貿易で第一位の中国のご機嫌伺いに忙しく、安保を全面依存している米国とはやや距離を置いており、当の米国の苛立ちはよく理解できる。寓話にあったような気がするが、猫の屋敷の小さな穴倉の奥に美味しい食べ物が見え、あるネズミがその穴倉をくぐってたらふく食べたので、大きく膨らんだ腹が邪魔して、入った穴倉を通り抜ける事ができず、結局ネコに食べられてしまう話を思い出す。ネズミとは韓国を、猫とは中国を指すのだが。

国の独立にあれだけ拘っている韓国が、中国が爪を研いでいるのを承知の上で、目先の金に目がくらんでいる浅ましい姿を見ると、まだまだ幼稚な国と軽蔑せざるを得ない。

それに引き替え、中国人の香港の人たちが将来の中国編入に備えて富の疎開をしている

賢明さは対照的である。香港の大財閥の李嘉誠氏が、近年傾斜投資してきた中国本土への不動産投資を、今年になって引き揚げ始めたとして、中央政府からクレームが出たとの報道があるが、本人は否定しつつ引き続き資産の引き上げに動いているようだ。リスクを冒してまで目先の利益は負わないと言うのが彼の経営哲学なのであろう。彼は一代で世界のビッグテンに入るほどの大富豪となったが、リスクテイクに限界を設けて、必ずしも最大の利益を追わないと言う理性派である。こうした先見性のある理性的な経済人がいる一方、身の安全に危険が迫っている事に気が回らず、目先の富を追い求める成金の商人が韓国である。

今の状況は、明治維新直後の征韓論騒ぎの発端となった末期の李氏朝鮮王国の頑迷さを思い起こさせる。国民性や民族性と言うのは、変わらないものだと感じる。朝鮮の人たちの特徴は、目先の事には優れた能力を発揮するが、将来を展望する先見性を苦手とするようだ。研究分野でノーベル賞受賞者が皆無の原因は、直ぐには金に結び付かない事を蔑視するのが、民族の特性だからであろうか。

排他的経済水域

日本 451万km² 中国 96万km² 韓国 45万km² 北朝鮮 13万km²



排他的経済水域とは

南沙諸島・尖閣諸島・竹島等の問題に関連して、排他的経済水域という言葉が、しばしば使われている。

余白があるので、ちよつと示す。

日本が排他的経済水域の面で如何に「大国」で中国や韓国が如何に小国であるか……。

自由原稿

銭湯あれこれ

藤田隆彦

私は銭湯ファン。大きな湯船につきりボーと過ごすひときは無上の幸せだ。スポーツクラブの大風呂を利用しない日は、自宅の狭い内湯でなく、近所の銭湯へ行く。都心の千代田区に住んでいるが、馴染みの銭湯は二つある。一つは都内で最新の平成十五年開業の区営の「江戸遊」。もう一つは内神田にある「稲荷湯」だ。前者は、サウナ、食堂を揃えた見栄えの良い施設であり、御茶ノ水界隈の学生さんがよく入浴している。後者はいかにも町の小さな風呂屋といった感じで、私を含めた年寄や若手ランナーの利用客が多い。

最近この「稲荷湯」では、皇居一周ランナーがこの銭湯のロッカーに服をしまい、ランニングウェアに着替えた後、マラソンをし、戻って入浴するそう。先日そのような感じの学生達に会い、尋ねたところ、関西方面からのバスでの上京客で、スマホで東京駅近辺の風呂屋を探し、旅の疲れを癒しているとの事。流石ネット時代、と感心した次第。

銭湯の利用代金は四六〇円だそうだが、六五歳以上の年寄に属する私は区から支給される「入浴券」を使い無料で利用している。五〇年前の学生時代、住んでいた世田谷区で利用したときは、確か三〇〇円程度だったと記憶する。約一五倍のアップだが、物価上昇率との相関は不明である。

壁面の背景画であるが、ほとんど「富士山」である。日本一だろうからか？ 最近の新聞報道によれば、都の風呂屋経営者は富士・新潟出身者が多いせいとか、北陸新幹線開業とともに定番の富士山ではなく、「立山連峰」の画も数軒現れたそう。確かに富士出身の私に言わせれば、富士湾から遠望する立山連山の峰々は富士山に劣らず絶景である。ぜひ初夏に富山を訪れ、氷見線の雨晴海岸辺りから残雪の立山連峰を見て欲しい。富士山に負けな景色と思われよう。運がよければ蜃気楼に出会うかもしれない。もうひとつ富山に縁のある話では、風呂桶は殆どプラスチック製であるが、それに「ケロリン」と印字してある物が多い筈である。「ケロリン」は富山の薬屋さんが製造している、鎮痛作用のある漢方薬であり、私もその昔、家庭薬として常備していた懐かしい薬である。

銭湯（公衆浴場）の歴史を紐解けば、遠く飛鳥時代の仏教伝来の頃、寺院に「浴室」が設けられ、そこで僧侶が入浴したのが公衆浴場の嚆矢との事。その後鎌倉時代になり、一般人からも入浴料を取る寺社が現れ、これが銭湯の始まりとか。斎戒沐浴、坊さんとの縁が深い。室町時代には、「風呂」という言葉も生まれ、浴後には、知り合いを招いて茶の湯や酒食がふるまわれた由。

戦国時代を経て江戸時代は庶民の一大娯楽場所になった。浮世絵にも見られるような、平和な庶民文化が花開き、銭湯で落語を聞いたり、囲碁将棋を楽しんだり、町のサロンという雰囲気だった。又、江戸期を通じて男女混浴であり、湯女や三助も登場し、まさに爛熟した町民文化花盛りといった場所であった。当方は、温泉では時々混浴の機会があったが、日常生活に密着した銭湯で混浴とは驚きである。風紀は紊乱しなかったのか？それとも日本人の徳性の高さか？おおらかさか？或いは単に無神経さか？よくわからない。

現代では、スーパー銭湯や健康ランドと名を変え銭湯は大きな娯楽施設として、庶民の憩いの場となっている。当方もかつて、クアハウスに週一回皆勤し、各種の風呂につかっ

たり、渥美清主演の「男はつらいよ、フーテンの寅」のシリーズを映画室で観たり、食堂では湯上りのビールを飲んだりして、日がな一日安上がりの時を過ごしたものだ。

最近では東京オリピックを前に日本を訪れる外人客も多いが、銭湯に関しては、清潔好きの日本人が好む「風呂」や温泉の入浴作法を守りつつ、心行くまで楽しんで貰いたい。又、時には菖蒲湯や柚子湯などの季節感も味わって欲しい。そして世界中に銭湯文化の良さを発信して貰いたい。

以上

自由原稿

三たび激戦した白井城

平山 善之

N君、

佐倉の秋祭りが終ると、日ごとに寒さが増してきます。お元気ですか。

千葉氏は一四五七年から一五九〇年まで、本佐倉城を本拠地とし、前半は古河公方に、後半は小田原北条氏に臣従しました。本佐倉

城は、佐倉市と酒々井町にまたがって郭の跡を鮮明に見ることができますが、眼下の印旛沼に湊を有し、沼の周辺各地に数箇所支城を備えました。今日はその一つ、白井城の話をしましょう。

白井城は沼の西端にあり、三度、名のある武将を迎え撃ったことで有名です。今、印旛沼を見下ろす高台の城跡は公園として整備されていますから一度ご覧下さい。沼の対岸に向い城として師戸城跡があり、こちらでも千葉県立公園として空堀や土塁が見られます。

最初の戦いは文明十一年(一四七九)、守将は千葉孝胤、攻め手は太田道灌です。孝胤の祖父馬加康胤は、享徳四年(一四五五)千葉本家胤直を殺し本家を篡奪したのですが、胤直の甥、實胤・自胤が武蔵に逃れ上杉家の重臣太田道灌を頼りました。この頃、関東は古河公方と上杉が争いを繰り返していましたが、胤直は上杉派、康胤は公方派でしたから、道灌も放っておけなかったのでしょう。文明十年、両者は松戸で衝突、孝胤は負けて白井に逃れました。道灌は白井を六ヶ月囲み、最後は落としたのですが、弟、太田図書資忠を戦死させたほどの激戦でした。しかし、何故か道灌も實胤・自胤も、守将を置いて武蔵へ引

き上げたので、一旦落ち延びた孝胤は白井城を奪い返すことが出来ました。

二度目は永禄四年(一五六二)、守るは千葉の一族白井久胤、寄せ手は里見の一族正木大膳亮時堯。里見氏は新田源氏、百年ほど前安房にきて勢力を得てこの頃越後の長尾景虎と同盟して小田原北条氏に対抗していました。この前年、景虎の陣触れで里見も行動を起こし、北条方であった千葉一族の諸城に襲い掛かります。白井城も前回と異なりあつけなく落城し白井氏も断絶してしまいました。しかしこの年、小田原城を囲んだ景虎は城を落とせず、鎌倉八幡宮の社前で上杉の名と管領職を継ぎ政虎と名乗ることを宣言して、越後へ帰ってしまいます。北条方はまた勢いを盛り返し、白井も千葉一族が取り返し、一族の原氏が城主となりました。

三度目は永禄九年(一五六六)守るは原胤貞、攻め手は上杉政虎、即ち謙信が自ら襲来しました。この二年前、小田原北条と里見義弘は第二次国府台合戦を戦い、里見は敗れて安房に逃れ、北条の勢力は益々増大しました。見かねた謙信は何度目かの関東出兵を試み、白井城を囲みます。謙信は白井城の向かいに一夜城まで築いて攻撃しましたが、前二回と違っ

て、此の時は落ちなかつたのです。謙信にも長期帯陣できぬ事情があつたのでしよう、囲みをといて去ります。永禄十二年上杉と北条は越相同盟を結び、北条の関東の覇権は確立し、戦国の世も漸く終末に向います。

本佐倉城の千葉本家ですがこの頃城主が二人も家臣に殺されるといふ乱脈ぶりであつたため、小田原の介入を招き、北条氏は兵を派して直轄統治したと伝えられます。天正十八年(一五九〇)、秀吉の小田原攻めの時、千葉介重胤は十五才、小田原城中にありましたが開城後、江戸の陋巷に住んだといひます。関東一円家康のものとなり、本佐倉城は久野宗能が一万三千石で、臼井城は酒井家次が二万石で入りました。翌々年、家康の五男武田信吉、次いで六男忠輝が本佐倉城主になりますがいずれも短く、土井利勝が一六一四年鹿島台に新城を築くと廃城になりました。臼井城も慶長九年(一六〇四)家次が高崎へ転封となるや廃城となり、江戸期を通じ臼井は成田街道の宿場町でありました。

長くなりました。またお便りします。

十一月討論会講演概要

地政学・ポーランドと韓国

講演 新井 宏氏
討論司会 隆 恵氏

歴史上には、時代や地域が異なつていても良く似た現象がしばしば現れる。

例えば、イタリアのルネッサンス期、法王庁の領土を一気に拡大したチエーザレ・ボルジアは、塩野七生が「優雅なる冷酷」と表現したように織田信長そっくりの男であるが、そればかりでなく、彼の妹、ルクレツァー・ボルジアもお市の方と同じく絶世の美人、相次いで政略結婚をさせられたところまでお市の方と似ている。

そう思つて見るとミラノ公国のイル・モーロは武田信玄、傭兵隊長の反乱は明智光秀であらうか。

このように対比してみると、なじみの薄いイタリア史でも何となく判つたような気がする。これが外国の歴史を覚える極意だと思つている。

さて、今回のテーマは、皆さんにも歴史上の類似性についての事例などを紹介して頂

うという趣向であるが、その事例研究として、「地政学」におけるポーランドと韓国の類似性を論ずる。

最近の韓国の右往左往ぶりは、第一次大戦後、百二十五年ぶりにやっと祖国を回復したポーランドがその後、ナチスとソ連を天秤にかけて「均衡者外交」を進めたため、再び国が分割されてしまった歴史と重なる。

絶対に手を握るはずのないナチスとソ連が秘密裏にポーランドの分割を決めたために第二次世界大戦は始まつた。

その歴史に学ぶことなく、韓国は「均衡者外交」を気取つて、中国に近づき、米国や日本を苛立たせている。

もちろん、輸出依存度の極めて高い韓国経済にあつて、中国は最大のお得意先であるから当然の面もある。それは中国が急成長する過程で、韓国の安価な中級技術を必要としたからであるが、今やその中国は中級技術の面では完全に韓国に追いつき、追い越し、競争相手に変貌しつつある。

韓国は見栄っ張りの国で、目に見える製品技術、上澄み技術には強いが、それを支える基礎技術は今でも日本に依存している。そのため、韓国から中国への輸出品には、日本の高度な技術部品や原材料が大量に含まれてい

る。中国としては、今や韓国を排し、日本と直接組みたい状況になっている。そのため、韓国の得意な分野が中国に次々に侵食され、経済は落ち込む一方である。組むはずのないナチスとソ連が秘密裏に手を握ったように、経済面で韓国を抜きにして中国と日本が手を握るかも知れない。韓国の新聞が自嘲している。「中国市場が二倍に拡大しても韓国に分けない」と。それが「地政学」である。

朝鮮戦争は米国が一九五一年にアチソラインを敷き、共産国との防衛ラインから韓国を外したために始まった。

今や米国は第二のアチソラインを敷いて、韓国を放り出しても、韓国がベトナムになるだけだと割り切っているかも知れない。

事実、共産国家ベトナムは今や反中国の代表格であり、韓国がもし中国に近づいても、いずれ第二のベトナムとなり、中国と対立するに決まっている。その逆に、ナチスとソ連が秘密裏に手を握ったように、米国と中国が突然手を握って韓国をいじめるかも知れない。今回は、「地政学」から見た「韓国問題」を議論するつもりであるが、折角の機会なので、「中欧の歴史」と「先進国と後進国が同居する韓国」についても紹介したい。

忘年会の「案内」

既にご案内通り、今年の忘年会は左記住所の高級カラオケ店の「コート・ダジュール・銀座コリドー店」で開催します。今回は幹事の独断で、参加費は無料にして、多くの方のご参加を得たいと思っています。

開催要領

○ 日時 十二月九日(水)

一七時三〇分〜二〇時

○ 場所 「コート・ダジュール・銀座コリドー店」

中央区銀座七丁目二の二二

○ 一〇二〇―三七五―六八八

地下鉄「銀座」駅徒歩三分

JR「新橋」駅六分、

JR「有楽町」駅八分

○ 趣向 一時間半程度歓談、その後一時

間程度カラオケ大会 以上

祝出版

三戸岡道夫著

『親子で学びたい』

二宮金次郎伝 生き方・考え方』

致知出版社

